

手賀沼が海だったころ

豊四季開墾をめぐって 4月に開催した講演会



1. 豊四季の開墾とは

さる2013年4月21日、柏中央公民館講堂において、当会は「豊四季開墾よもやま話」と題した講演会を行いました。講師は、豊四季歴史文化研究会の末武芳一氏です。

下総台地では、中世から馬が放牧され、江戸時代には小金牧や佐倉牧という幕府直轄の牧がつくられました。

明治維新で明治新政府ができる、家禄を失った旧武士階級や都市困窮民の救済のため、下総の牧の大規模な開墾が新政府によって企てられ、明治初年から入植が行われました。

開墾地には、開墾順序に合わせて地名がつけられ、初富（鎌ヶ谷市）、二和（船橋市）、三咲（船橋市）、豊四季（柏市）、五香（松戸市）、六実（松戸市）、七栄（富里市）、八街（八街市）、九美上（香取市）、十倉（富里市）、十余一（白井市）、十余二（柏市）、十余三（成田市、多古町）と続きました。

新政府が作った開墾会社の中心は政商などであり、一般の開拓民は、自然環境の厳しさや農業用具の不足といった困難に直面、当初三年間を経過すれば独立農民となすとの約束も反故にされたのです。そこで各地で、開拓民は政府に嘆願、または裁判所に開墾地所有権獲得の訴えをおこすなど、長期間の係争を経るに至りました。

豊四季は、明治2年(1869)11月から入植が始まり、東京の旧武士階級などの人た

ちが開墾に参加、後に付近の農村の農家の次三男なども開墾に加わりました。豊四季は、東京から来た開拓民が比較的多く残った場所でしたが、田畑からあがる収入だけでは生計が難しく、豊四季開拓百年記念碑碑文に「蓑木釘の副業寒夜深更に精魂を傾け」とあるように、木釘や蓑を作る副業がさかんでした。

2. 4月の講演会当日の様子

4月の講演会の講師をつとめられた末武芳一氏は、東京で美術の教員を長年つとめ、定年後は下町風俗資料館や岩崎邸の仕事もされて来られました。末武氏は、東京台東区の歴史に詳しい方で、豊四季の歴史にも熱心に取り組まれています。

今回、明治初期から行われた豊四季の開墾について、地図や資料を示しながら、東京から来た開拓民の移住の経緯、慣れない農作業と自然環境とたたかった開墾の様子、開拓民の子孫の方の紹介など、多彩な観点での講演をして頂きました。



<熱く語った末武先生>

当日は雨にも関わらず、この講演会に、66名の方が集まりました。豊四季開墾について、興味深い話の数々が

熱く語られ、講演でも多くの写真を画面に投影しましたが、全部をお見せできずすみません。会場周辺での展示も地図や写真、当時の日誌などと豊富でした。



<受付風景>

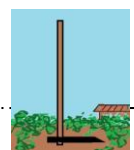
3. 地域に密着した歴史

明治政府が始めた小金原の開墾、「四季 豊に稔れ」とはうらはらに、そこには壮絶な苦闘の歴史がありました。一畝一畝荒野は拓かれる一方、水戸街道・旧日光街道・流山街道筋を中心とした授産事業があり、やがて耕作地に鉄道が敷かれると、駅や学校も開設、さらに近年は住宅公団による大規模団地が建設されて人口が増加したと、末武氏は語りました。

比較的近い時代、身近な地域とはいえ、そこに眠る歴史を垣間見た講演会でした。



<展示した資料>

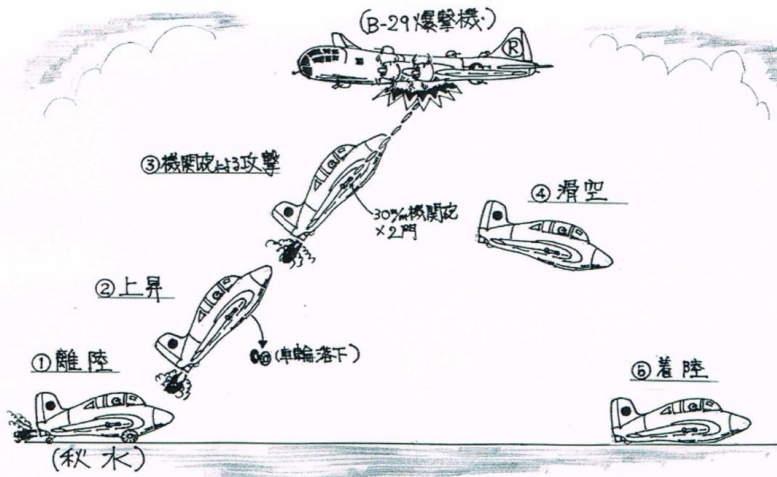


平成25年度歴史講座第6回 「柏市史の原点を探る ～豊四季の開墾～」

講師 豊四季歴史文化研究会事務局・末武 芳一氏

2013年10月27日(日) 13時30分～(13時開場)、柏市新富近隣センター会議室にて、4月に講演して頂いた末武先生を講師とし、豊四季開拓関連の講座を行います。ふるってご参加を。

ロケット戦闘機「秋水」 平和を見つめ直し、今考える



イラスト：若山善幸会員

<秋水の飛行方法：左、秋水復元機（三菱重工名古屋航空・宇宙システム製作所）：右>

1. 秋水開発の経過

太平洋戦争末期、米軍の B-29 による日本本土爆撃に対して高度 1 万 m 以上を飛来する B-29 に対して日本軍の戦闘機はエンジンに高高度用過給器を装備していないため十分に迎撃することが出来ませんでした。

そのため高高度の希薄な大気中でも飛行可能なロケットエンジンを装備した戦闘機を陸海軍と民間で共同開発することが計画されました。一方、当時同盟国のドイツではロケット戦闘機メッサーシュミット Me163 が既に開発されていました。

ドイツのそうしたロケット戦闘機の機密資料を積み、昭和 19 年 (1944) 3 月フランスのロリアンを出航した 2 隻の日本の潜水艦のうち、1 隻は大西洋にて撃沈され、後発の潜水艦伊 29 も、7 月 14 日、日本占領下のシンガポールに到着したものの、バシー海峡で米海軍の潜水艦に撃沈

されてしまいました。しかし、伊 29 潜に乗っていた巖谷英一海軍中佐が、ドイツ航空省から渡された資料を零式輸送機に乗り換えて日本に持ち帰り、その資料をもとに日本版のロケット戦闘機は設計・開発されたのです。

巖谷中佐が持ち帰った資料は、Me163B の機体外形 3 面図などわずかなものでした。

それらの数少ない資料を基に短期間の間に軍と民間 (三菱重工) で試行錯誤を繰り返しながら開発を行い、昭和 20 年 (1945) に試作 1 号機が完成しました。

そして海軍は、昭和 20 年 (1945) 7 月 7 日に横須賀市追浜の海軍飛行場にて試験飛行を実施したのです。

しかし試験飛行は離陸には成功したが、エンジントラブルで機が墜落して、操縦していた犬塚大尉は殉職しました。その後、実戦配備に向けて訓練及び開発は終戦まで継続して行われましたが、当時の空襲による工業力の低

下や初めてのロケットエンジンの開発等に多くの難問があり結局終戦までに実際に飛行したのは犬塚大尉の乗った一機のみでした。



<追浜の試験飛行>

2. 無謀な計画のもとで

秋水は、乗員一名、尾翼のない三角形の主翼のみの小型飛行機ながら、ロケット燃料の甲液 (過酸化水素の濃度 80% の水溶液と安定剤) と乙液 (水化ヒドラジン 30% とメタノール 57%、水 13% の溶液に、銅シアン化カリを少量混入) の混合による反応により推力を得て、最高時速 900 Km、約 3 分半で高度 1 万 m まで達する、という画期的な戦闘機でした。

それは、1万mという高高度に駆け上がって、装備されている30ミリ機銃2門で銃弾を撃ち込み、その後もロケット燃料による上昇と下降を繰り返し、最後に燃料が尽きると、グライダーのように滑空して、胴体から出した機で着地するもので、操縦するのにも高い技量を必要としました。また1回の飛行に、約2トンと大量な燃料を必要としたのです。

秋水は約1年の開発の後、当初昭和20年(1945)9月までに数千機作る計画であったといい、生産計画自体、無謀であったと思われます。

最初、燃料を自製できることから、軍首脳はこのロケット戦闘機に飛びついたので、ロケット燃料の甲液である過酸化水素の80%もの高濃度のものは、日本では生産したことがなく、高濃度の過酸化水素は、強酸性で鉄などの金属類を溶かし、不純物が入ったりすると爆発するという扱いに困るものでした。また燃料の生産、貯蔵容器の確保などには多額の費用が必要でした。

3. 戦争の記憶と遺構

陸軍では、柏飛行場に秋水を配備する計画でした。柏飛行場が首都東京に近く、1,500mの舗装滑走路を持ち、銚子沖などから東京に侵入してくるB29を邀撃するのに絶好の位置にあったことがその理由です。陸軍の航空審査部の関係者が柏飛行場近くの寺院などに宿営、秋水実験隊の拠点が作られました。

また、過酸化水素などロケット燃料の貯蔵庫として、地下燃料庫が建設されました。最初は十余二の飛行場に

近い場所に主に実験飛行用、後に昭和20年(1945)春頃にリスク分散のため、柏飛行場から東へ2Kmもはなれた花野井や大室に地下燃料庫が建設されました。

花野井・大室の地下燃料庫の建設を指揮した森川陸軍少尉は現地に滞在し、多くの朝鮮人労務者が建設に従事しました。

一方、海軍でも横須賀の海軍航空技術廠や元山航空隊、百里基地などで、海軍三一二航空隊(秋水隊)を中心に搭乗要員の訓練がおこなわれました。



<聞取りの様子>

当会は今年3月に海軍三一二航空隊所属した元海軍中尉鈴木晴利氏の聞取りを行い、鈴木氏は、低圧タンクなどの装置を使った種々の訓練、三一二航空隊士官パイロットによる「秋水」命名の経緯、試験飛行時の様子と犬塚大尉の殉職などについて、詳細に語られました。また8月24日には、花野井の秋水地下燃料庫の見学会を行いました。

戦後長らく世に知られて来なかった秋水ですが、関係者の証言や関連の戦争遺跡(下図参照)は残っています。

秋水は戦争末期にたった1年の短期間に海陸軍と民間が総力を挙げて協力し試験飛行までにこぎ付けましたが、一方その開発や燃料生産に多大な資金を要し、国民生活に大きな負担を強いるものでした。

ロケット戦闘機秋水 2013年8月24日

地下燃料貯蔵庫跡見学会コース

1: 大洞院

2: 排気筒跡

3: 燃料庫跡

4: 燃料庫跡

*8月24日の当会主催の秋水地下燃料庫見学会資料(若山善幸会員、山崎舜造会員作成)をもとに加筆しました

「一筆啓上 火の用心」



文・写真:会員 山野辺恭夫

「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」は、簡潔な手紙の範例です。

作者は家康側近の本多作左衛門重次で、取手市井野に住んでおりました。

重次の蟄居地にある墳墓と菩提寺に初詣(平成25年元旦)に行きました。

重次を茶毘し埋葬した場所は、居住地であった下総国相馬郡井野お墓山(現取手市井野桜ヶ丘)で、ここに墳墓があり、茨城県指定史跡となっています。

墳墓地は約7メートル四方、高台にあり、近くの菩提寺である知恩院派・浄土宗

本願寺(取手市青柳1-1-57)により管理されております。

昨年夏に来た時は、震災により五輪塔墓石などはひっくり返っていましたが、修復されておりました。高台にあります。建物が多く、見晴らしが悪い。昔は利根川を見下ろす景勝地であらうと思いました。

本願寺の奥様に案内してもらい、本堂にある重次着用の甲冑などを見学しました。

墳墓地の立て看板やお寺の資料によれば、本多重次の事績は、「重次(享禄2年1529—文禄5年1586)は三河国に生まれた徳川家譜代の家臣、家康の側近。鬼作佐とも言われた」とあります。

「一筆啓上・・・」は、長篠の戦(天正3年1575)の陣中から妻にあてた手紙です。

「お仙」は幼少の嫡男仙千

代(本多成重)のことで、成重は慶長18年(1613)に越前国(現福井県)坂井の丸亀藩主、4万3千石になっています。

天下統一を果たした秀吉は、再々家康に上洛うながしました。用心する家康に秀吉は生母大政所を人質として送ったため、家康は上洛して臣従を誓いました。

この時、作左は三河国奉行として大政所の世話役になりましたが、大政所の住居を多量の薪で囲み、僧侶に読経させて、「家康に不測の事態があれば、焼き殺す」とのデモンストレーションを行いました。後日、このことが秀吉に知られ、作左 打ち首の厳命が秀吉から家康に何度も出されました。家康はしぶしぶ作左を蟄居。

蟄居先が上総国古井戸(現千葉県君津市)3千石、後に下総国相馬郡井野 3千石に転居。文禄5年(1596)7月16日、68歳で失意の中で没しました。

法名は本誓院殿清誉月窓浄運大居士、位牌は本願寺にあります。

ちなみに、旧丸亀藩の方々が観光バスで来て、墳墓地参拝をしたとのことでした。

写真は重次墳墓と本願寺にある重次着用甲冑です。甲冑背後にある金扇は家康公からの拝領だそうです。



<本多重次の墓所>



<本多重次の甲冑>

松ヶ崎城跡台地東南斜面の工事について

昨年県により松ヶ崎城跡東南斜面が危険地帯に指定されましたが、そのため東南台地下で開発する場合、斜面に擁壁設置等の措置が必要になりました。

台地下の開発に伴い、なるべく東南斜面を削らずに擁壁など対策ができないか、あるいは柏市にその斜面や台地下の一定範囲を借り受けてもらえないか検討し、柏市長への申入れその他行ってききましたが、残念ながら斜面や台地下を柏市に借り受けてもらうことが出来ず、工事が行われました。

擁壁の上の台地上段の斜面は30度の角度で削られることになり、少なくとも斜面の断面や遺物の調査をしてもらうようには柏市教育委員会には要請しました。



<東南斜面の工事(2013.8)>

松ヶ崎城の保存に今後ともご協力願います。

手賀沼が海だったころ

HPもどうぞ⇒ <http://www.matsugasaki.jo.net/>

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報 第25号 2013.10.15

発行人:森伸之 編集人:藤田理恵子

年会費2千円 振込先:千葉銀行 柏支店 口座番号3461475